

隣人を自分のように愛しなさい

朴 シネ

奨励者紹介〔ぱく・しね〕

韓国メソジスト教団派遣宣教師

同志社大学キリスト教文化センター オープン・プログラム講師

立命館大学非常勤講師

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

(ルカによる福音書 10章25—37節)

隣人を愛することの

難しさ

キリスト教は愛の宗教であります。神を愛し、隣人を愛することは律法の中で最も重要な掟であり、律法全体と預言者の言葉がこの二つの掟に基づいていると聖書には記されております。すなわち、キリスト教は神という目に見えない存在への愛を、今、ここで、隣人愛という具体的な行動をとおして実践する宗教であります。

しかし、キリスト者にとっては当然のことのようと思われるこの隣人愛という徳目はそれほど簡単な問題ではありません。「隣人を愛しなさい」という言葉に従うと、多くのものを失ってしまうかもしれない、自分の生活が成り立たなくなるかもしれないという不安が私たちにはあるからであります。少なくとも、私にとってこの言葉は重荷のように感じられる時が多々ありました。一体、私は、これまで出会って、かかわっている人々を自分のように愛しているのか。その人々に親切に振る舞い、もてなし、彼らの必要に何とか答えてあげようと頑張っ

てきたつもりではありますが、その行いが形だけではなく本当に自分を愛するようなものであったのか。この問いの前で私はいつも戸惑いました。時には自分の姿が偽善者のように思われて、苦しくなる時もありました。「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉はいつも私の足りなさを自覚させる言葉でありました。隣人愛に生きていきたい。しかしながら、他者に無制限に開かれた生き方というのは一体可能なのでしょうか。

わたしの隣人とはだれ

本日の聖書の箇所が登場する律法の専門家も、もしかして隣人愛を命じられたこの言葉を負担に感じていたかもしれません。だから、隣人はだれなのか、その明確な範囲を、その枠をイエスから決めていただきたかったのかもしれません。彼は同じ民族で、同じ神を信じるユダヤ人を自分の隣人と理解し、少なくともその枠の中では律法に記されている義務を成し遂げてきたと想定されます。なぜならば、「あなたが知っている神への愛、隣人への愛を実行しなさい」というイエスの言葉に対して、「わたしの隣人とはだれですか」とイエスに聞くからであります。聖書には彼が自分を正当化しようとしてこのように聞いたと記されております。つまり、彼は民族同胞であるユダヤ人の人々の間では、良き関係を築いてきた人、尊敬されている人、すなわち「良き隣人」だったかもしれません。自分のこの隣人の範囲への定義が間違っていなかったのであれば、「私は確かに隣人愛に生きてきた」と、彼は自分の正当性を認めてもらいたかったのかもしれません。

これまでのわたしの

生き方を揺さぶる存在

そのような思惑から発せられた律法の専門家の「わたしの隣人とはだれですか」という問いに対して、イエスは「善いサマリア人のたとえ」を聞かせてくださいます。この物語は追はぎに襲われて、すべてのものを失った上で、深く傷つき倒れていた旅人を救ってくれた人は、同じユダヤ人であった祭司、レビ人ではなく、犬猿の仲の民族であったサマリア人であったという内容であります。当時の常識からすると、追はぎに襲われた旅人の隣人は、祭司とレビ人であります。旅人が追はぎに襲われていなかったのであれば、もしも正常な状況において旅人と祭司、旅人とレビ人が出会ったのであれば、民族同胞として彼らは隣人らしき関係を築いたかもしれません。しかし、今、すべてのものを失い、誰かの助けがなければ機能できない瀕死の状態に陥っている旅人は、祭司にも、レビ人にも隣人になることはできませんでした。祭司とレビ人はこの人と関係をもつと自分たちにも危険が迫ってくるかもしれないと恐れていたのかもしれません。あるいは、神殿で使える仕事をしていた祭司とレビ人にとって、死体に触れると汚れるがゆえに、あえて、自分たちの身の清浄を保つために、旅人を無視して、その傍を通り過ぎてしまったのかもしれません。どのような理由であれ、祭司とレビ人にとって、限りなく弱くされている旅人とは隣人になれない存在でありました。瀕死の状態に陥っていましたが、まだ死んではいなかった旅人は、祭司とレビ人には自分たちを汚してしまう死体と等しい厄介な、価値のない存在であったのです。これに対してユダヤ人と仲の悪かったサマリア人は、ユダヤ人とはかかわらないというこれまでの自分の生き方を放棄して、傷ついたユダヤ人の旅人に近づき、介抱をしてあげました。

隣人愛に The Others は

存在しない

イエスはこの話を語り終えて、律法の専門家に、「この三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になっただか」と尋ねます。すなわち、愛すべき隣人とは予め決められているわけではなく、あらゆる状況の中で弱くされ、虐げられている人々が私たちの隣人であり、その人の本当の意味での隣人になることが「隣人愛」であるとイエスは教えてくださるのです。隣人愛に生きていきたいが、無限に他者に開かれるのは不可能なので、どうか私が愛を実践すべき隣人の範囲をはっきり規定してもらいたいという律法の専門家の問いに対して、イエスは全く違う形で答えを与えられました。イエスの言われる隣人愛はその枠をはっきりとすることからではなく、むしろその枠を崩すことから始まるものであります。すなわち、隣人を自分のように愛するためには限定された隣人という枠を崩さなければならないのです。イエスはこの物語をとおして、隣人とは外的な関係、物理的な距離によって枠を決めたり、定義づけられたりするような問題ではないことを教えてください。イエスの言われる隣人とは、明確な物差しによって予め規定されるような対象ではありません。私たちが無視できる、通り過ぎてもよい、すなわち、隣人愛の対象ではない The Others は存在しないということです。

しかしながら、私たちは、律法の専門家のように内と外を分ける線を求めます。他者の存在によって自分の生活が脅かされることを恐れるからであります。最低限の枠を、その範囲を規定してもらいたいというのは正当な要求かもしれませんが、しかし、隣人の枠を決めることには深刻な非人間化の問題が潜んでいることを忘れてはなりません。枠の外にある存在への無関心を正当化するからであります。その枠の外にある人々の苦しみは、ミステリーでも、悲劇でもありません。ただ、新聞の一行を飾る陳腐な事件、事故にすぎません。祭司とレビ人は自分たちの感情的消耗、時間、努力、金、そしてあらゆる面倒な代償を払わなければならない隣人という大きな負担から自分自身を守るために、旅人を非人格化したのであります。

他者の弱さに

突き動かされ

〈隣人になる〉

この箇所について、神学者越川弘英は、「私たちが隣人の範囲を規定したり、『隣人とは誰か』を定義することが問題なのではない。隣人とはある特定の出会いの中から立ち現れてくる存在であって、その出会いの中でその人の隣人となるか否かを私たちが問われるのである。そのような隣人は私たちに対するチャレンジとなる。そしてそれは私たちにとって大きな負担となることもある」（越川弘英『新約聖書の学び』キリスト新聞社 2016年 140頁）と説明します。このような大きな負担をあえて受け入れながらも、サマリア人を利他的な行動、すなわち隣人愛というチャレンジへと突き動かした力は、瀕死の状態に陥っていた旅人の姿であり、その人を見て「憐れに思った」ということであります。

他者の苦しむ姿は私たちを揺り動かします。「いまにも倒れかけているひとがいると、それを眼にしたひとは思わず手を差しだしている。そういうふうには〈弱さ〉はそれを前にしたひとの関心を引きだす。弱さが、あるいは脆さが、他者の力を吸い込むブラックホールのようなものとしてある」（鷲田清一『〈弱さ〉の力』講談社 2001年 181頁）。その人がどこの出身なのか、自分と同じ民族なのか、同じ宗教なのか、助けてあげる価値のある存在なのかなどを問う余裕などありません。他者の苦しみはブラックホールのように私たちの注意を引き、行動することを私たちに全身で訴えてくるからであります。このような要求に素直に応じ、その人を助

ける行動に移したのは、他ならぬサマリア人でした。正統派ユダヤ教の伝統からすれば不浄な存在であり、社会的には見捨てられたものであって、宗教的には異教徒であったそのサマリア人でした。

隣人愛の本質である「憐れむ」という言葉の原意は「はらわたが痛む」という意味であります。深く傷つき、苦しんでいる人の姿が目に入った時、自分の体が痛む。理屈ではなく自分の身体感覚として伝わってくるその痛みがサマリア人を突き動かし、行動へと至らしめるのであります。私たちは自分の体のどこかで痛みを感じたら、その痛みにただちに反応し、適当な処置を取るでしょう。これは痛みに対する自然な反応であります。その痛みは休まず訴えてくるので、無視できず、かかわることになるのです。自分と他者の間に線を引き、その線の外にある人々を非人間化することによって、その人の痛み、苦しみに無関心を正当化することではなく、苦しむ人に近づいてみて、その痛み、苦しみを共有し、手を差し伸べること、そこから真の隣人と言えるような新たな関係が築かれるのだとイエスは教えています。

神の大きな愛の中で、

〈隣人として生きる〉

私たちの助けを必要とする苦しんでいる人々の隣人として生きることが「隣人愛」であります。自己中心的な存在である私たちを、隣人を愛するものになるように働きかけるのは、他ならない他者の弱さであります。他者の弱さは、私のはらわたを突き動かし、その痛みを共感させ、行動に移すように働きかけます。また、そのような行動に移すことのできる原動力を与えてくれるものは、神の愛であります。神は私の弱さをそのまま受け入れ、肯定し、愛しておられます。他者を愛することができない私、自分自身でさえも愛することができない私、この愛の貧しさに苦しむ私が、神によって生かされ、赦され、愛されているということへの実感と信頼があってからこそはじめて自分を愛するようになり、さらに自分を愛することのように他者を愛するようになるのであります。憐れみ深い神によって生かされている存在としての実感と信頼をもって、助けを必要としている苦しむ人々の隣人として生きる私たちでありたいと思います。

2019年7月24日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録